要旨

『思考過程におけるガラス造形　−言葉とモノとの往環−』

東京藝術大学大学院
美術研究科 博士後期課程
研究領域　工芸
陶芸第 3 研究室ガラス造形
1318919　　吉井こころ

幼少時に潮だまりを覗いた時、そこに広がる異世界に魅了された経験が筆者のガラス作品制作の原点である。この「異世界」が潮溜まりから、文学の中にある精神世界や、哲学、宗教の言説に展開していった。筆者にとって異世界とは現実と非現実を反復する「過程」である。物理学や数学など理論上にのみ存在する虚数のような、現実世界には存在しないが認識され、そこでの理論が正数の世界にフィードバックされることで成立する関係と同様である。筆者はこの異世界の視覚化をコンセプトとし、言葉をモチーフにガラス作品を制作している。

本論文は、ガラス作家の視点から、文学をはじめとした言説を理解する為の自作品の意義と作品制作で得た独自の内部彫刻(インナースカルプチャー)技法及び内部彩色技法を提示する。筆者は、言葉をガラス内部に視覚化し、理解する過程を作品で表現してきた。現代社会において私たちの感性や精神に影響を及ぼす物の殆どが、人工物で構成されている。この事実を認識し人工物である言葉の、言語化以前の存在を、ガラス造形を通して探究することで、人工物から人間へ回帰する可能性の示唆を得ることが本論文の目的である。

第 1 章では、筆者の制作のプロセスを実例と共に示した。言葉とその本質との狭間に注目し、その齟齬を立体とみなすことで、文章や建築物など人工物として確立しているものの起源を見る方法を探究するのが筆者の制作である。ガラス内の空洞と外形を同時に制作することで虚と実、正負を逆転させる手法を取りながら言葉や行間に隠された異世界の表現を、遺跡などの建造物の形態に求め表現している。筆者のガラス作品は覗いた中に彫刻があり、これらは虚構でありながら実在として見えることで、異世界を表象している。

言葉は人間の意識の産物である。その言葉の起源には無意識の産物である別の世界があると仮定し、透明なガラスの内側と外側との関係からこれを捉える。ガラス素材の厚みを空

間として捉え、この空間の意味を考察する行為は、人工物の根源にあるイデアを見ようとすることと同義である。

第 2 章では素材の特性の物質面と精神的な面を考証し、光の反射、吸収、屈折やガラスの組成を活かした作品展開が、確信的な視覚的効果をもたらすことを示した。表面の切削角度による屈折、鏡面研磨による内面反射により、ガラス内部が複層的に見える効果について実例を挙げて論述した。またガラス素材の歴史やリサイクル性を見直すことにより、今後のガラス工芸の持続可能な展望を示した。次にガラス工芸としての装飾の意義を「祈り」「非現実世界の視覚化」「制作者からの励まし」に求めた。これは装飾文様が表象するものが過去からの教えであり、非現実世界を視覚化する祈りであり、制作者からの励ましであるという考察から得た結論であり、この装飾と作品との関係を論述した。

第 3 章では、筆者独自の内部彫刻技法と内部彩色について、そこに至る経緯と成果を示した。前者はガラスの透明性を活かし、文学や言説における言葉をモチーフに、遺跡を思わせる複雑な形態でガラス内部を造形する技法である。後者は内部彫刻に彩色し、ガラスに図柄を焼き付け、転写する技法である。これらの技法に関する実験とデータを提示し、その意義を考察した。

第 4 章ではこの技法を用いた修了制作に至る地平について論じた。文章を思考、理解するための制作を自我と認識し、素材との均衡について実例を挙げつつ論述しながら、本論文執筆時の参考文献の一つである、フーコーの『言葉と物』の一節を理解するための制作過程を紹介した。原初は密接であった言葉と物が、時代と共に離別していく関係に筆者は異世界を見、この理解を修了作品の一つとした。

第 5 章では、本論文の検証とこれに基づいた作品制作、そこから繋がる文学の連想の過程を示した。これは、他者の著作物と人工物であるガラスの関係から、筆者自身の著作物と筆者自身がガラスを原料として作成した素材へと考察の対象を転換することになり今後の研究に繋がる。

筆者の作品のガラス内部の形態は、文学や言説の顕在化であり、読解への思考過程であり、精神世界でもある。外部の形態は現代社会を意味し、その外部が内部に入り込んで人間は成り立っている。精神世界は、認識できても不可侵な領域である。それをガラス作品で示しつつ内部が外部に露出していく思考を終章で論じた。

筆者の読書方法に於いて文学、言説、その行間にある意味を理解する道程は多岐に亘る。ガラス内部を覗くことと、文章内にある言葉の起源や行間を推察することとの関係性を論述し、文学などの言説から発現した制作から、再び言説の世界に戻るその往環の過程を、作品とともに示しエビデンスとする。外界である文章を吸収、反転、反射してガラス作品としていることを修了制作をもって論拠とし、本論文の執筆行為自体を外界への還元とした。